

戦争はぼくをおとなにした

小川未明

青空文庫

まだ、ひる前まえで、あまり人通りひととおのない時分じぶんでした。道の片みちかたが
 わに一軒けんの染め物店ものてんがありました。表おもてへ面めんした、ガラスのはまっ
 た飾り窓かざりまどには、若い女わかおんなの人がひときるような、はでな反物たんものがかかっ
 ていました。それだけでも、通とおる人々ひとびとの足あしをとめて、目めをひく
 に十分ぶんといえますが、もう一つ、この窓まどの内うちへ、セルロイド製せいの、
 大きおおなはだかのキューピーがかざられて、いつそちゆういうの注ちゆうい意いをひ
 きました。キューピーのからだの色いろは、うす赤あかく、二つの目めは、
 まるくまっ黒くろでした。この健けん康こうそうあかな赤あかん坊ぼうほうどもある人にんぎよ
 形うは、そのひょうきんな顔かおつきでは、いまにも、足音あしおとにおど
 ろいて、目めをくるくるさし、通とおりかかひとる人ひとになにか悪わる口くちをいっ

て、いたずらをしかねまじきふうに見えました。つい無心できか
かる人まで、その笑いにつりこまれるくらいだから、わんぱくぎ
かりの子どもらが、なんでこれを見て、なんともいわぬはずがあ
りましょう。

いずれは、この近所の子どもたちでした。ふたりづれの男の
子が、どこからか往来へ出てきました。どちらも六つか、七つ
ぐらいです。キューピーに目をとめると、たちまち窓のそばへ寄
つてきました。

なんと思ったか、ひとりの子は、いきなり両足をひらいて、
大きな目をいからし、キューピーのまねをして、人形とにら
めっこをしました。

他のひとりには、また、自分の顔をガラスにおしつけて、できるだけ、よく見ようとしていました。しかし、なにをしても、キューピーには、手ごたえがありませんでした。ふたりは、これではこちらがばかにされるような気がして、腹立たしくなりました。「やいキューピーのばか！」と、ひとりは、手をふりあげて、なぐるまねをして、みせました。それでも、キューピーは、だまっています。

「こら、石ぶつけるぞ！」

このとき、とつぜん、もうひとりの、男の子が、

「この、キューピー、おとなりのユウ坊みただよ。」と、笑いだしました。

「ユウ坊ぼうつて、おりこう。」

「う、うん。」

「しようべんたれの、うんこたれなの。」

「はっ、はっ、はっ。」

そういつて、ふたりは、顔かおを見合みあつて、さもおもしろそうに、
笑わらいました。

青あおい空そらは、さわやかに、よく晴はれています。深ふかい、深ふかい、水みず
色いろがかつて、たれさがるあちらには、遠とおく木立こたちの枝えだが黒くろく、大おお
きな森もりの、頭あたまにさしている、かんざしのごとくみえました。そし
て昨夜さくやの霜しもが、まだ光ひかつて枝えだ先さきに凍こおりついているのが、日ひの光ひかり
に、銀ぎんのごとくかがやいていました。こうして、冬ふゆの間あいだ、じつと

して、眠ねむっていた自然しぜんだけれど、もうどことなく、じきに目めをさ
ましそうなけはいがしました。

このとき、突とつぜん然ぜん、店みせの大おおきな戸とがあいて、おかみさんが、顔かお
を出だしました。

「みんないい子こだから、土つちのかわくまで、あつちへいつて、お遊あそ
びなさい。霜しもどけで、ころぶと着物きものがよくれますからね。」とい
いました。

ふたりは、これをしおに、ここをはなれ、道普請みちぶしんの砂利じやりがつ
んであるほうへ、あるいていきました。

そのとき、清吉せいきちは、ちようど染め物屋そものやの前まえを通とおりかけていま
した。かれは、まだ十歳さいぐらいの少しょう年ねんであります。この朝あさ、

母のいいつけで用たしに行く途中でした。

いまゆかいそうに、とんでいった、小さな子どもたちの姿を見て、かれは、自分にもかつてあんな時代があったと思うと、そのころのことが、一つ一つ目に浮かんで、すべて楽しいことばかりだったような気がしました。ことに、父親が、戦争にいかず、家ではたらき、また家も焼けなかったら、その楽しい生活は、いまでもつづいて、自分は、しあわせであつたらうと思うのでした。

かれは、昔あそんだ、友だちの顔などを、ぼんやり記憶から、呼びもどしている、ふいに、

「おばけがきた。」という、さっきの子どもたちの高い声がして、

その空想は破られたのでした。

清吉は、顔をあげて、声のする方を見ました。

「おばけがきた！」

「こわいよう、おばけがきた！」

ふたりの子どもは、道の上であつた、おばあさんに向かつて、ちようど、臆病犬が、遠吠えをするときのように、ののしつていたのでした。

これを見た、清吉は、なにごとだろうと思ひ、できるだけ早く、そこへと近づいたのでした。

「あつ、おばあさんが泣いている。」

かれは、そうさすると、胸がどきどきとして、急に目頭が熱

くなりました。

「いったい、どうしたことだろう？」と、清吉は、立ち止まって、このありさまを見つめたのです。

さむいけれど、空気は、音のはねかえるほど澄んで、さえきつていました。また、ふたりの子供は、ぴちぴちとして、これから伸びようとする盛りだったから、なにをみても、おもしろく、みなれぬ姿は、おかしかったのです。

美しいものには、すぐに飛びついたであろうし、みにくいものは、すべておぼけにみえたのでありました。ふたりの子どものみずみずしさにくらべて、このおばあさんは、またなんと、暗く、しなびきって、みじめでありましたでしょう。だれでも、年をと

ると、これがしぜんすがたの姿であり、この姿は、やがてはてしない暗くらい方ほうへ向むかって歩あるくものだということをしして、この子こどもらには、知しりようがなかつたのです。どこか、森もりの中なかのお墓はかからでも、出でてきたおばけのようにしか見みえませんでした。

「やあ、おばけが泣ないてるぞう。」

「泣ないたりして、おかしいな。」

このとき、清せい吉きちは、

「こら！」と、遠とおくから、どなりました。

「なんで、おばあさんに、悪わる口くちをいうのだ！」

かれは、顔かおをまつ赤かにして、大おおきな声こゑで、しかると、子こどもは、おどろいて、あちらへ逃にげていってしまいました。

おばあさんは、おばけだといわれたのが、くやしいのか、それとも、自分の姿が、そんなに見られるのは、もう先が長くないからであろうとさとして、悲しいのか、清吉は、おばあさんの、さめざめとして、泣くありさまを見ただけで、自分までが、罪をおかしたように、からだへ冷たい水をかぶるような思いがしました。

かれは、おとなのこうして泣くのを見る記憶が、これで二度あります。その一つは、おかあさんでした。おかあさんが、あちらの赤い空をみながら、自分の家が、焼けてしまったといって、しくしくないたときです。それから、もう一つは、いまおばあさんが、こうして、泣くのを見たことです。かれは、おばあさんのそ

ばへ近づくのちかに、勇氣ゆうきがいりました。

「おばあさん、かんにんしておやり。まだ小さいちいんで、なんにもわからないのだから。」と、清吉せいきちは、かろうじていいました。こういっておばあさんを、なぐさめるつもりでした。

けれどおばあさんは、だまつて、泣きなつづけています。下したを向むいて、目めから、にじみでる涙なみだを、やせた手てでふいていました。

「小さちいくて、まだなんにもわからないのだよ。」と、かれは、同おなじことをくりかえすより、いうことを知りしませんでした。

「わたしも、家いえを焼やかれて、身み寄りよりはなし、知り合あいのところで、やっかいくすりになつてゐるが、寒さむさのため、持じび病ようのリユウマチがでて、お薬くすりを買いかいにいった……。 」と、あとの言葉ことばは、よくきこえ

ず、また、泣ないていました。

清吉せいきちに、おばあさんの心持こころもちが、わかるような気きがしました。だから、自分じぶんの言葉ことばに力ちからをいれて、さも自信じしんありげに、

「ねえ、おばあさん、おばあさんが、黒くろい頭巾ずきんをかぶって、つえをついでいるので、おばけと思おもったのだよ。きつと、そうだよ。いくら寒さむくても、こつちでは、めつたに、頭巾ずきんなんかかぶらないから。」

こう、清吉せいきちが、いうと、はたして、おばあさんは、胸むねのわだかまりがとけたらしく、やっと顔かおを上げました。その顔かおには、しわがよつて、目めは、落おちこんでいましたが、かすかに口くちのあたりへ、笑わらいをうかべて、

「そうかいな、わしのいなかでは、冬ふゆになると、みんな頭巾ずきんをかぶるが。ああ、それで、おぼけといったのかいな。」と、力ちからのな
い声こゑで、いいました。

「おばあさんきつとそうですよ。だから、かんにんしておやり。」
と、清吉せいきちは、かれのせいっぱいのちえをしぼって、なぐさめ
ました。

「そうだったかいな。」と、おばあさんはもう一度どしなびた手てで、
目めのあたりをこすると、ふたたび、つえをつきつき、腰こしをまげて、
歩あるきはじめました。

霜しものとけかけた、ちかちかと光ひかる、一筋ひとすじの道みちが、はるかかな
たの、煙突えんとつや、木立こだちの、黒くろい棒ぼうきれをたてたごとくかすむ、地ち

へいせん 平線の方へとのびていました。おばあさんは、どこまでいくの
 であらうか。その道を、だんだんと遠ざかってしまいました。清
 いきち 吉はぼんやり、ひとところ立って、そのあわれな影を見送った
 のでした。

「戦争が悪いのだ！」

かれの口から、しぜんに、この言葉が、ついて出ました。かれ
 は、空想にふけりながらあちこちと、道を曲がって歩くうち、
 いつしか電車の通る、幅の広い路へ出たのでありました。

あの夜、ここを通ったのだ、かれは、逃げた日のことを思い出
 しました。小さな弟を負っている母に手をひかれて、燃え狂う、
 火に追われながら、この道を、通ったのでした。

逃げたのでした。
 やはり、町から郊外へのがれる、人々の群れとまじって、

「もう、ここまでくれば、だいじょうぶだ。」

小高い丘のようなどころへたどりつくと、みんなは、こういつて休みました。

一方では、火のむちで打たれて、狂うように、烈しい風が、暗く、青ざめた、夜の空を苦しそうな叫びをあげて、吹いていました。風は、すこしの間、一息いれると、その後は、かえって、すさまじい勢力をあらわしました。そのたびに、たんぼのむぎや、まわりにしげる木立の枝が、いまにもちぎれて、闇の中へさらわれそうにみもだえしたのです。焼けくずれる町では、花火

のごとく、火の粉が高く舞い上がり、ぴかりぴかりとして、凱歌を上げるごとく、ほこらしげにおどつていました。

人々は、あちらの木の下に、一かたまり、こちらのやぶ蔭に、一かたまり、いずれも押しだまって、ただ目だけを、赤く焼ける町の方へ向けて、おそろしいありさまを見守っていました。そのうちひとりが、ちがったところを指すと、みんなが、その方を向きました。へびの舌のように、紅い炎が、ちらちらと、黒い建物の間から、上がりはじめたばかりです。

と思ううち、見る見るすそをひろげて、一方の火と合し、たちまち、あたりは火の海となつてしまいました。

「もう、さつきから、どれほど焼けたろう。」

「ぎぞ、人がたくさん死んだろうな。」

こんな話し声がきこえました。清吉は、いくらがまんしても、からだがふるえて、ぞくぞく寒けがしました。かれは、こんなにくじのないことでどうしようかと、自分をはげしました。

「おかあさん、あつちの空をごらん。」と、とつぜん、気を転じようと、清吉は、さけびました。

「どうしたの。」と、母は、ききました。

「あそこに、星が出ていますよ。」

そこだけが、いつもの静かな夜の景色と、変わりがなかったからです。そこだけを見るなら、地上で、いま、町が焼け、人が死んでいるということが、信じられない気がしました。

そして、このすさまじいあらしにも、たけくるほのお 猛り狂う炎にも、むかんし 無関心でいられる星の世界が、あまりにも、ふしぎにみえたのです。
いろ 色とりどりの星が、ほし たがいには仲よくして、たのしいことでもあるのか、めめ ささやき合うような、また、おどけて、まばたきをしたり、目と目でものをいったりしているようなのが、なんとなく、うらやましかつたのでした。じぶん 自分たちも、ほしみやこ 星の都へいったら、おとうさんは、せんそう 戦争にいかなくてもよかつたし、いつもみんなが、いっしょにたの 楽しく暮らすことができたであろうにおも と思ひました。
ちようど、おかした 丘の下は、むぎ 麦ばただけでした。ふさふさした穂が、かぜ 風のために、なみう 波打っていました。

「坊や、なにしてるの。」

はは 母の背中せなかで、目をさました、小さな弟おとうとが、頭あたまといっしよにからだをゆり動かうごかしているのに気づきづいて、清吉せいきちは、弟おとうとのほうをば、見みました。すると麦むぎばたけで、破やぶれがさをかぶつて手足てあしをひろげた、鳥追とりおいのかかしが、夜よるも休やすまずに、番ばんをするのを、弟おとうとが、まねているのでした。

「人ひとが、こんなしんぱいに心配しんぱいしているのに、坊ぼうやはわからないんだよ。」と、母ははは、目めをふいていました。こうきくと、清吉せいきちは、なんだか弟おとうとが、かわいそうになりました。いたわつてやらなければならぬと思おもいました。

しだいに、東ひがしの空そらが、黄きいろ色いろみをおびて、夜明よあけが近ちかづいたのであります。この時分じぶんから、どこか小川おがわのふちで鳴なく、かえるのこえ声こえ

が、高く、しげくなりはじめで、さながら、雨が降る音のように絶え間なくきこえてきました。

ひとり去り、ふたり去り、しのびやかに、立ち去る人たちがつづきました。清吉も、こうしているのが心細くなつて、母親のたもにつかまり、

「もう、帰ろうよ。」といいました。

母は、いつまでも、泣いていました。

「おまえ、帰ろうつて、どこへ帰るの。もうお家はないんだよ。」と、母の声は、小さく、ふるえました。

「そう、だったか。」と、清吉は思った。そしてこのときほど、自分の母をいたましく、感じたことは、なかったのです。

「義雄よしおちゃんのおじいさんが、焼やけたら、いつでもこいといったよ。ぼくは、なんでもして、これからおかあさんのおてつだいをするから。」と、かれは、胸むねの中なかが熱あつくなつて、母ははを元げん氣きづけようとしても、わずかに、これだけしかいえなかつたのでした。

しかし、母ははは、なんとも答こたえず、いつまでも泣ないていました。

かれは、これではならぬと知しつて、

「おとうさんが、帰かえれば、新あたららしい家いえをこしらえてくれるよ。」と、つづけていいました。

しばらくすると、母ははは、泣なきやんで、そでそでで顔かおをふきながら、

「おまえがあるから、おかあさんは、もう、けつして泣なきませんよ。」と、母ははは、いったのでした。

清吉せいきちは、あの日のことを思い出おもしました。もしそうでなかつたら、きょう、おばあさんを見ても、なぐさめようとしなかつたでしょう。

「ぼくは、もうおとななんだから……。」

かれは、はりきった気持きもちちで、胸むねをそらし、両足りょうあしに力ちからを入れて、電車道でんしゃみちを歩あるいていったのでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「赤い雲のあなた」小峰書店

1949（昭和24）年1月

初出：「童話」

1947（昭和22）年2、3月合併号

※表題は底本では、「戦争《せんそう》はぼくをおとなにした」となっています。

※初出時の表題は「戦争は僕を大人にした」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年6月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

戦争はぼくをおとなにした

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>